怖き物見たしの俚諺に漏れず、一日も早く見んことを欲し、又一日も早く超えんことを欲じたる甲斐ありて、今や身は幸に此絶頂に達せるを、如何に呼吸遑れりとて爭で容易く去らるべきや。眸を放てば四圍の萬山は、開闢以來幾千年間堆積し來れる雪に埋れ、混沌として蒙昧未開の境に眠れる蠻民を代表するものの如く、密雲低く白雪と相接觸し、荒涼寂寞極り無く、唯々斃死の人馬を待つ數羽の鴉、啞々近く頭上を飛翔する有るのみ。風益々強く寒愈々甚し。俄然戰慄肌膚粟を生ず。匇々杖を降坂に曳く。

辛苦間關夏又冬。　龜玆月氏入觀風。
今朝聊達斯行志。　立馬崑崙第一峯。

又

立馬崑崙第一峰。　雲煙萬里豁心胸。
吾生四十猶漂泊。　慚此巍然羣嶽宗。

登坂は緩且つ短く、降坂は險且つ長し。棒の如き兩脚を踏み締め踏み締め、且つ止り且つ下り、午後四時五十分、先づ第一の危險界を跋涉し畢り一行期せずして相